「houseS/shopB」（ハウスエスショッピビー）

経　歴
木村吉成／木村松本建築設計事務所
1973 年和歌山県生まれ。大阪芸術大学卒業後、狩野忠正建築研究所を経て、
2003 年に木村松本建築設計事務所を共同設立。
現在、大阪芸術大学芸術学部建築学科准教授。

松本尚子／木村松本建築設計事務所
1975 年京都府生まれ。大阪芸術大学卒業後、
2003 年に木村松本建築設計事務所を共同設立。
現在、大阪市立大学、京都芸術大学非常勤講師。

主な受賞に、第 4 回藤井厚二賞、第 33 回吉岡賞、第 12 回 JIA 関西建築家新人賞、第 3 回 JIA 東海住宅建築賞など。

作品解説

世界のどの地域でも、働く人が見える街は魅力的だ。アジアの街路や広場にひしめく屋台と店舗、それが都市計画に沿ってつくられた街でも、道に向かって（ある時は道そのものに）立ち働く人の姿からは動的でいきいきとした活気が感じられる。そこには時間と智慧の堆積した街並みと、手に取れる環境を使って生きる人間の根源的な凄みがある。計画敷地にかつて建っていた小さな魚屋も、面する歩道上部を庇テントですっぽり覆って商う、近隣のアーケード付き商店街の一角がスプリットしたような店構えであり、大きな影をつくるテントの下は公私が流動する活発な領域だった。それは公共空間のルールからは外れた使い方だが、近隣の街並みと接続し道に私的領域を拡張する風景からは、生活する人の環境の読み取りと多様な工夫があり、学びがある。そして大きな道に面する小さな魚屋の庇テントがとても大きかったように、人びとの実践からは都市の構造を見出すことができる。
この建物はセレクトした古書と雑貨の販売、立ち飲み屋も営む店舗併用住宅である。立派なケヤキと銀杏の並木、ゆったりした歩道を備えた 4 車線道路に面している。隣接する大学施設の樹木と相まって開放的な周辺環境であり、歩道への接道長さが約 18m、奥行きが約 2.2～3.7m という、間口の広さと奥行きの浅さが特徴的だった。まずここに建設できる整形かつ最大の建築面積を幅 14,080mm、奥行き 2,000mm と設定する。柱脚にのみラーメン金物を採用した幅 450mm の木造ラーメン柱を長辺方向に配置させることで間口に対して歩道側に大きく開き（柱上端のロフト層を合板で固めることでラーメンフレームを形成している）、奥行き方向には筋交いを設けて固める構造計画としている。人の活動領域と交差する筋交いは床高変化（筋交いの下に「潜る」）と什器・家具の片側配置（筋交いから「離れる」）によって空間に溶け合うものとした。居住部は浴室、キッチン、リビングと順々に並列したプランとしている。時間の蓄積を感じる面前の並木や電柱に匹敵するスケールの構造体と、それらからなる構えをもつ建物が敷地の「浅さ」を歩道も含めた道路幅全体の「深さ」へと変換し、歩道と敷地が混ざりあった「近さ」が現れることを期待した。
生活する人が自律的に使える場所はだんだん少なくなっている。都市の構造を読み取り、読み替えることから得られる学びを単純な骨格からなる建築の構えとする。そこにあるのは生活する人が手に取れる新しい環境だ。道に立ち暮らす人々のため、都市を耕すように設計をしたいと考えた。

「高岡のゲストハウス」

能作文徳 / 能作建築設計事務所

1982 年　富山県生まれ

2005 年　東京工業大学工学部建築学科卒業

2007 年　東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了

2010 年　能作文徳建築設計事務所設立

2012 年　博士(工学)学位取得 (東京工業大学)

2012 年～2018 年　東京工業大学大学院環境・社会理工学院建築学系助教

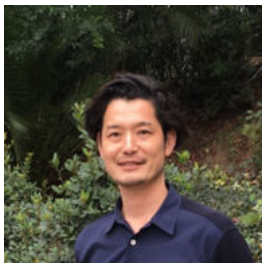
2018 年～2021 年　東京電機大学未来科学部建築学科准教授

2021 年～　東京都立大学都市環境学部建築学科准教授

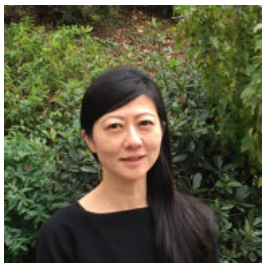
高岡のゲストハウス（設計：能作文徳＋能作淳平）は築 40 年の木造家屋を私たちの祖母の住居とゲストハウスへと改修する計画である。１棟の建物を３棟（食堂、客室、祖母の住居）の分棟形式に作り替え、家族や友人が集える場にした。祖母が引っ越しせずに済むように、既存建物を部分的に解体し、段階的に修繕を繰り返し、敷地内にあるマテリアルを再構成するように計画した。第１期工事では既存の座敷に水まわりを増築し、第２期では２階建部分の小屋組をクレーンで移設し、残りの部分を解体し、第３期では食堂の躯体を新築し、その上に小屋組を載せて既存瓦を葺き直した。第４期では客室を整備し、第５期では庭の土中環境改善を行い、食堂の外壁に土壁を塗った。瓦屋根の風景を残し、家の記憶を繋ぎ、断続的に成長していく家のあり方を目指した。

サクラと住宅

コンマ／神田（こうだ） 篤宏（あつひろ） + 佐野（さの）もも



神田篤宏
1972 年　東京都生まれ
1996 年　早稲田大学理工学部建築学科卒業
1998 年　同大学大学院修士課程修了
1998〜2007 年　株式会社北川原温建築都市研究所
2007 年〜　コンマ , 一級建築士事務所 comma 設立



佐野もも
1976 年　神奈川県生まれ
1999 年　横浜国立大学工学部建築学科卒業
2003 年　東京藝術大学大学院修士課程修了
2003〜2005 年　株式会社北川原温建築都市研究所
2006 年　comma design 設立
2007 年〜　コンマ , 一級建築士事務所 comma 設立

撮影：長谷川健太

2 層の RC と、3 層の木造からなる店舗併用住宅。敷地の一角に立つ老齢化したサクラの樹木とともに、ゆるやかに生成変化しながら街並みとの関係をつくっていく建築を考えた。
都内の住宅地、建主が購入を決めた敷地は交差点に面し、その一角には樹齢 30 年ほどのソメイヨシノが植えられていた。このサクラが伐採された後に敷地が手渡されるとのことだったが大きく枝葉を広げたその樹はすでに個人の所有を超えて地域の共有財産のようでもあり、何とか残せないだろうかと考えた。売主の了承を得て樹木医に診断してもらったところ、まだ元気であり、将来樹木が老齢化しても根から水を吸い上げ、葉で光合成を行うシステムは生き残り、足元から出た枝が老齢化した幹に変わり樹木化して世代交代するという話を聞き、この樹を残すことにした。
サクラには色を変え落葉する葉、樹木に生息する虫の生命、年月をかけ変化する樹形、さまざまな時間軸の重なりが見られる。このサクラのように変化し続ける、時間軸と重層性の建築を考えることにした。
設計初期に樹木医と共に桜の根張り、枝張りを調査し、それに基づいて配置計画や建物形状の検討を進めた。
構成は、外的要因により定められた 2 層の RC 架構と内的要因による 3 層の木架構の重ね合わせから成る。サクラの枝張りに合わせて階高の大きな RC の骨格を設定する。そこに居場所をつくっていくように木の床組や造作を重ねていく。2 階のバルコニーとして外側に張り出した RC の臥梁とその内側に架けられた木造床をずらすことで、内外上下に各層を横断した街との立体的な関係性が生まれる。
サクラや街区に呼応した長期的な時間軸を持つ RC 架構と、より短い生活スパンに対応した木架構による 2 重の構造性を持った建築である。
こうした異種架構や生活要素、そしてサクラの木、それぞれがずれながら重なり合うことでゆるやかに生成変化していく、時間軸を内在した建築を目指した。